

理解度＆釣れる度100%



マルキュー



HERA BAIT POWER BOOK



Contents

- 02 現代バラケエサの救世主「漾麩」
- 04 ウドンセットの浅ダナ釣り(冬)
- 08 ウドンセットのチョーチン釣り
- 12 段差の底釣り
- 16 両グルテンの底釣り(新べら狙い)
- 20 両ダンゴの底釣り(早春)
- 24 グルテンセットのチョーチン釣り(早春)
- 28 ウドンセットの浅ダナ釣り(早春)
- 32 両ダンゴの浅ダナ釣り(早春)

The target period 12月～5月

2026
春
冬
号

HERA BAIT POWER BOOK

Pickup! New item!!

ばく ふ 「瀑麁」

タナで直下に拡散するボン系バラケ



バラケ性 強 中 弱
重さ 重 中 軽

ボソタッチでありながら、まとまりも良好。丸めやすく、指圧によるウキのナジミ幅のコントロールが容易なエサに仕上がります。上層の魚を刺激しないようにタナに入ったあとは、重さを備えた素材が弾けるように拡散。直下へ降り注ぐようにバラケ、ウワヅリやウキに現れる余計な動きを抑えながらくわせエサと同調し、食いアタリを導きます。季節や釣り方。狙う深さを問わない汎用性の高さも特色の1つです。



ボソタッチでありながらまとまりのあるエサに仕上げることができる。重めの素材がタナで直下に拡散する。

現代バラケエサの救世主!!

バラケエサの基本要素は開きです。開くことでアピールし、魚を寄せます。このときエサのタッチはボソに仕上がります。ボソエサはまとまりにくいのでエサ付けのコントロールが難しくなります。一般的な「粒戦」に「粒戦細粒」や「とろスイミー」というパターンではエサがボロボロと崩れてエサが上手く付けられなかつた方もいるでしょう。

そこで「瀑麩」の登場です。この「瀑麩」はボソを維持しながらまとまりやすいのが特長。「粒戦細粒」や「とろスイミー」の代わりに「瀑麩」を使うことで、これまで名手しか使えなかつたバラケエサを誰もが手にできるようになったのです。

また、直下にバラける特性も兼ね備えており、これによって、糸ズレにつながるようなウワズリを抑え、へら鮎をくわせエサに近づけさせてくれます。

あらゆるセット釣りに使えるので、これから時季にバッグに忍ばせておきたいアイテムの登場と言えるでしょう。

ブレンドはどうする？

基本ブレンドは「粒戦」100cc+「瀑麩」100cc+水 150 におすすめのバラケエサ 200cc。全体に占める「粒戦」の割合が多くなっている。これは現代セットで必須の重さがより顕著になっている証し。なおさらエサ付けが難しくなると感じてしまうところだが、これが「瀑麩」を入れることで問題なく解決できる。おすすめのバラケエサに関しては、細かく軽い「ふぶき」、中間的な「セットアップ」、重くて粗い「ヤグラ」を組み合わせてほしい。どれを選ぶかは特長を踏まえた好みで構わないですし、2種類を 100ccずつでも OK です。

「粒戦」100cc+「瀑麩」100cc+
水 150cc+
おすすめの
バラケエサ 200cc



厳寒期想定・数を釣る定番釣法

ウドンセットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

へら鮒の活性が下がる晩秋～冬に効果的な釣り方が浅ダナのウドンセット釣りです。魚は積極的にエサを追わなくなり、ダンゴエサの芯に飛びついてくる魚は少なくなります。そうなると、バラけた粒子にゆっくり寄ってくるようになります。ですから、このバラけた粒子に寄ってきたへら鮒にくわせエサを食わせるセット釣りが有効なのです。活性が低いのでバラケエサをたくさん打って魚を寄せるのではなく、自分が釣るタナに言葉どおり集魚しなくてはなりません。それには正確なエサ打ちと、バラケエサがバラけすぎないようにすることが重要です。元々バラケエサはバラけやすいブレンドですが、これを確実にタナまで持たせることが重要なです。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛けり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。魚が寄ってくれれば少しづつナジミが少なくなります。すると、エサ持ちがあまくなることで自分のタナに集魚できなくなり、それが釣れない原因になるので注意しましょう。

タックルセッティング

竿はエサ打ちのコントロールがしやすく、手返しのよい短めが基本ですが、周囲との兼ね合いで少し長めでもOKです。少しでもウキが動くように極端に大きなウキは使わず、また下ハリスは長めからスタートします。

■仕掛け図

竿●9尺（規定最短+1尺）

ミチイト●
(タナ 80 cm) 0.6 号
(メーター規定) 0.8 号

ウキ●細パイプトップ
(タナ 80 cm) ボディー 4 cm
(メーター規定) ボディー 4.5 cm

ハリ●
(タナ 80 cm) 上5号、下2号
(メーター規定) 上6号、下2号

ハリス●
(タナ 80 cm) 上 0.5 号 8 cm、下 0.4 号 50 cm
(メーター規定) 上 0.5 号 8 cm、下 0.4 号 50 cm



エサ落ちはくわせエサを付けた状態で水面に
4目盛りでいるよう設定する。

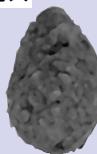
まとめやすくエサを持たせやすい！

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc +
「瀑麩」100 cc +
水 150 cc +
「ふぶき」100 cc +
「バラケマッハ」100 cc

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号



+



+



+



+



●作り方

「粒戦」50 cc、「瀑麩」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「ふぶき」100 cc、「バラケマッハ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。



「さなぎ粉」漬けの作り方はコチラ↓



●くわせエサ

「力玉ハード(S)」

「力玉」の「さなぎ粉」漬け

「感嘆」 ウドンセットの浅ダナ釣りのくわせエサは「力玉ハード (S)」、「力玉」の「さなぎ粉」漬け、「感嘆」がおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。

●タナを深くする

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみましょう。特に厳寒期になるとへら鮒は上層に上がってこないこともあります。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないので、1.3mとか1.5mと少し深いタナを狙ってみましょう。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしましょう(スタート時は50cm)。これでアタリが多くて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cm詰めてみます。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めましょう。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先します。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることは充二分にあり得ます。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないときは軽いもの、動きが多いときは重めにするのが基本です。

●上手く釣れないときは……

サワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、浅ダナが成立しない状況と判断します。タナの違う釣り方、チョーチンセット(8ページ)や段差の底釣り(12ページ)に切り替えましょう。

ウドンセットの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けしてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度も繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。



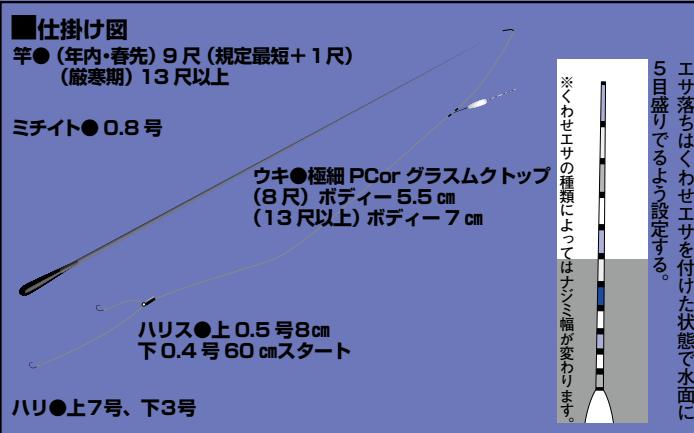
時合を作りやすく安定して釣れる ウドンセットの チョーチン釣り

釣り方の基本

寒くなるとともに水温が下がるとへら鮎の活性は落ち、比較的水温の安定した層にじっとしていることが多いです。そうなると浅いタナではなく、深いタナを狙うチョーチン釣りの出番です。エサ打ちやタナのコントロールが難しい浅ダナにくらべ、一定のポイントにエサが打てるチョーチン釣りは時合を作りやすく、安定して釣れるメリットがあります。チョーチン釣りも浅ダナ同様、自分が釣るタナにへら鮎を集めなくてはなりません。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛かり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。次第に魚が寄ってくるとナジミが少なくなっていますが、その場合はエサをしっかり付けて同じナジミ幅をキープするよう心がけます。また、この釣りでは縦誘いを活用します。バラケエサが持ちすぎたとき、バラケエサが抜けてくわせエサだけになったとき、竿先を持ちあげるように縦誘いをしてみましょう。これに反応してアタリができることが多いのです。

タックルセッティング

竿の長さは水温が下がれば下がるほどへら鮎が下層へ下がるので長くなります。短い竿で動きが少ないとときは迷わず竿を長くしましょう。



短竿用年内・春先向きブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」100cc+

「瀑麩」100cc+

水 150cc

「セットアップ」100cc+

「ふぶき」100cc



+



+



+



+



●作り方

「粒戦」100cc、「瀑麩」100ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「セットアップ」100cc、「ふぶき」100ccを入れ、20~30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。



ウドンセットのチョーチン釣り

実釣基本テクニック

●くわせエサ

「力玉ハード(M)」

「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬け



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



ウドンセットのチョーチン釣りのくわせエサは「力玉ハード (M)」か「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬けがおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。

●竿の長さでタナを探る

短い竿で釣れるほうが釣りは簡単です。ですが、厳寒期になるとへら鮎はなかなか上層には上がってきません。サワリ、アタリなどウキの動きが少ないときは、迷うことなく竿を長くして深いタナを探ってみましょう。1尺違っただけでアタリ数が増えることもあります。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることがあります。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けでもいいでしょう。アタリが少ないとときは軽いもの、動きが多いときは重めにすると覚えておきましょう。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしましょう(スタート時は 60cm)。これでアタリが多くて、空振りやイトズレなどが目立つときは 5cm詰めてみます。それでも空振りが多ければさらに 5cm詰めましょう。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先します。

●上手く釣れないときは……

竿の長さを換えたり、ハリを換えてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、宙釣りが成立しない状況と判断し、底をねらう段差の底釣り(12 ページ)に切り替えましょう。

中竿（13尺以上）用厳寒期ブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」100cc+
「瀑麩」100cc+
水 150cc
「ヤグラ」150cc+
「ふぶき」150cc



●作り方

「粒戦」100cc、「瀑麩」100ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「ヤグラ」150cc、「ふぶき」150ccを入れ、20~30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

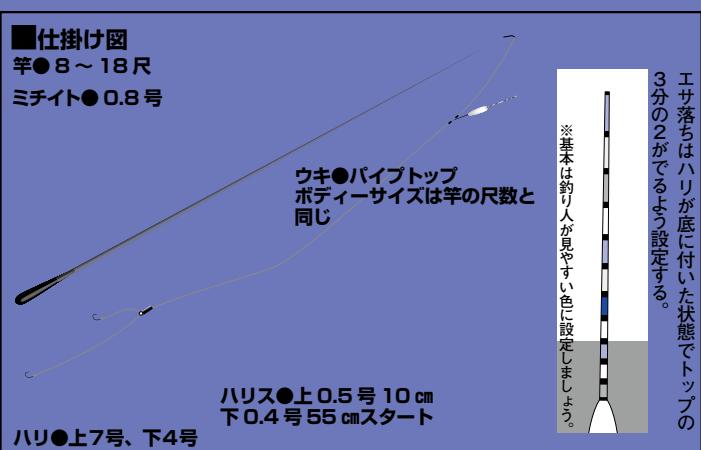
厳寒期の切り札 段差の底釣り

釣り方の基本

年を越して2月ぐらいまではへら鮎の活性が最も低下する時季です。こうなるとへら鮎はエサを追って宙層を泳ぐことが減り、底近辺でじっと動かなくなります。この厳しい厳寒期の切り札的釣り方が段差の底釣りです。バラケエサを底にためることでへら鮎を底に寄せて釣っていきます。ですから、バラケエサが落下中に抜けてしまったり、拡散範囲を広げすぎないことがポイントになります。浅ダナやチョーチン釣り同様、しっかりとバラケエサの重さでウキのトップがしっかりナジむことが大前提です。ナジミが少なくなると次第に魚はウワズってしまい、イトズレなどの動きはでますが、肝心の食いアタリがでなくなります。そしてもうひとつ重要なのが、くわせのウドンが必ず底に着いていること。そのためにもタナ取りは重要なので慎重に行ないます。また、おかしいなど感じたらすぐにタナを測り直して確認することです。

タックルセッティング

竿の長さは水深に合わせます。ウキの位置がチョーチンになるほうが釣りやすく、中途半端にあまつたり、穂先との距離が近すぎても釣りづらいので注意しましょう。この際、ハリスを長くすることでタナが取れるようならそれでもOKです。



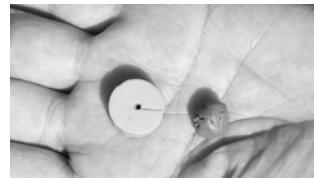
タナ取り方法

①宙の状態のエサ落ちを確認

上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

②タナを測る

下バリにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを差して水深を測る。普通に打ち込んだだけでは沖を測ってしまうので、ウキを持ちあげるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。このとき、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。

③ウキをズラす

水面にでたトップ先端の位置に合わせるようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが下バリトンントンといわれる設定だが、これでは下バリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。

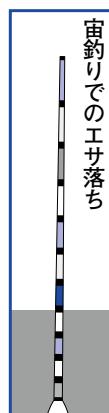


目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④下バリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。下バリが底に着いていれば、下バリの重さがウキにかかるないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りは多くなる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだとすると、下バリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りができるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす（深くする）かタナを測り直すこと。



段差の底釣り 実釣基本テクニック

●くわせエサ

「力玉ハード(L)」、「力玉ハード(M)」 「魚信」、「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬け

段差の底釣りのくわせエサは「力玉ハード (L)」か「力玉ハード (M)」、「魚信」、または「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬けがおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。



「魚信」の
作り方はコチラ↓



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



●ハリス調整

スタート時の設定は 55 cmですが、渋い厳寒期ではなかなかサワリやアタリがない場面もあります。そういうときは、ハリスを伸ばしていきましょう。最長で 70 cmまでは試してみてください。

● “置き直し”

アタリをだすためのテクニックとして“置き直し”を試しましょう。バラケが抜けてくわせだけの状態でアタリができるのを待ちますが、なかなかアタリがないときには、竿先でウキを持ちあげるようにしてくわせエサを置き直すのです。これでアタリができることが多いので活用してください。ただし、何回もしつこくやるのではなく、1~2回でアタリがでなければ打ち返します。

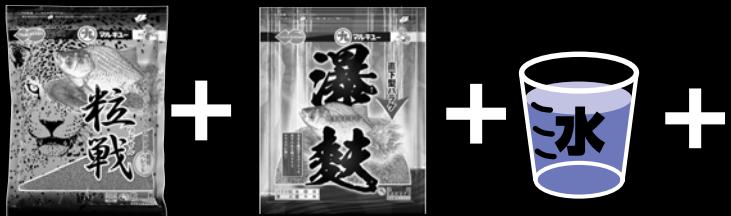
しっかりナジんでウキがじんわり上がる

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc +
「瀑麩」100 cc +
水 150 cc
「ヤグラ」200 cc +
「段底」100 cc

●作り方

「粒戦」50 cc、「瀑麩」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「ヤグラ」200 cc、「段底」100 ccを入れ、20~30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。



●エサが持たないとき

使っているエサに「瀑麩」をひとつかみ差し込むように追い足します。



●13尺以上なら……

「粒戦」50 cc + 「瀑麩」100 cc +
水 150 cc
「ヤグラ」100 cc +
「段底」200 cc

新べら狙い！

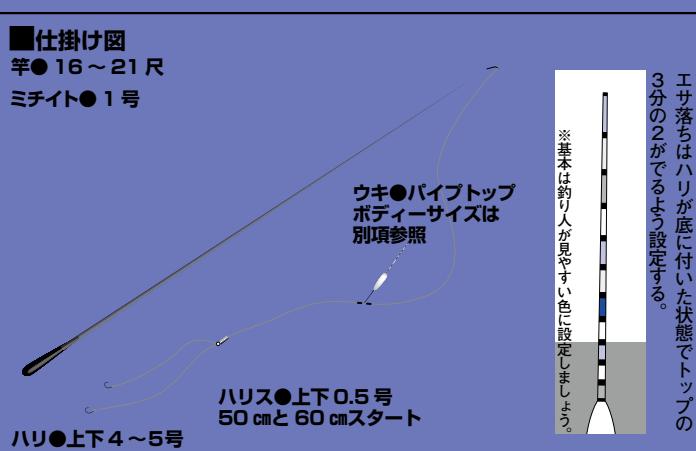
両グルテンの底釣り

釣り方の基本

厳寒期の底釣りといえば、段差の底釣りが定番です。ただし、新べら放流が行なわれる晩秋から冬には新べらの動きが活発なときもあります。こういう状況になると段差の底釣りではウキが動きすぎて釣りづらくなります。冬なので“段底”想定で釣り場を訪れることが多いですが、ときに思いがけない高活性に恵まれることもありますので、グルテンエサは必携です。食い気のある新べらが溜まっているエリアの釣りなので、エサは寄せを意識するのではなく食わせることを重視します。ですから自ずとブレンドも食わせタイプとなります。つまりエサはしっかり持つものを使いますので、当然釣り方もエサをしっかりナジませて釣っていきます。またフレッシュな個体を釣り続けるために、長竿で沖の底を狙うのがオススメです。釣り場の水深にもよりますが、16尺以上の竿でタナ2~3本ぐらいの水深が最適な条件となります。竿一杯（チョーチン）で釣るときもやや沖にエサを打つようにしましょう。

タックルセッティング

ウキのボディーサイズは水深に合わせますが（18ページのウキの選択参照）、基本は大きめ。流れが強かったり、振り込みがしにくい場合は迷わずサイズをアップしましょう。



食い気のある新べらにアピールする

●エサブレンド

「もちグル」50 cc +
「グルテン四季」50 cc +
水 120 cc



+



+



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●作り方と打ち始め

「もちグル」50 cc、「グルテン四季」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 120 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう 20 回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。2~3目盛りのナジミ幅がでれば OK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



●ウキの選択

ウキのサイズは水深によって変わってきます。水深ごとの目安を記しましたが、迷ったときは大きめを選択してください。

水深に合わせたウキのボディーサイズ

2.5m	12 cm	3m	13 cm
3.5m	14 cm	4m	15 cm

●ナジミ幅を意識しよう

バランスの底釣りは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両グルテンの底釣りの場合、2～3目盛りのナジミ幅ができるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることになります。逆に多い場合は、タナが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

●上手く釣れないときは……

両グルテンでウキの動きがおとなしい場合は、それほどへら鮒の活性が高くない証拠。バラケエサを使ってへら鮒を寄せることができる段差の底釣り（10ページ）に釣り方を変更しましょう。

両グルテンの底釣り 実釣基本テクニック

●エサを調整する

グルテンエサはエサ持ちがよいと思われますが、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。また、グルテンエサはそのまま使えとも言われますが、エサが持つように押し練りや手揉みでの調整は躊躇せずに行ないます。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度も繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエラーを抜くのが“押し練り”。エラーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



手揉み

つまんだエサを指先で揉むようにして丸めてエサ付け。この手揉みの回数でエサ持ちを調整する。

早春の管理～野釣りで活躍

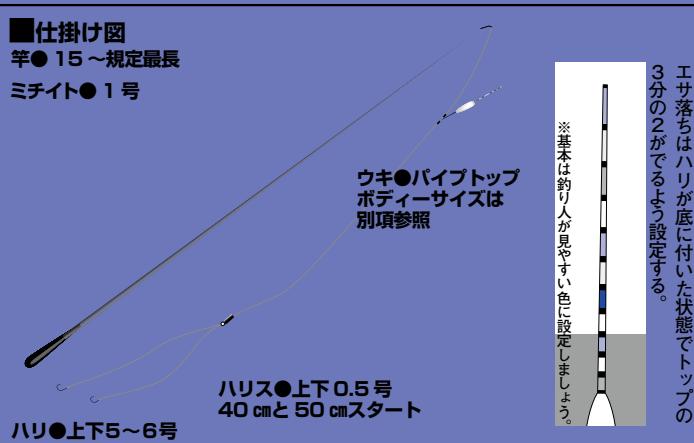
両ダンゴの底釣り

釣り方の基本

“春は底を釣れ！” という格言があるように、春先になると、底釣りが面白くなります。冬場に深いタナでじっとしていたへら鮒が水温の上昇とともに活性をあげ、徐々に浅いタナへと移動します。この際に、カケアガリを伝って浅場へと動きますので、春先は底釣りが有効なのです。狙いは浅場なので、長い竿で沖の底（カケアガリ）を狙うことになります。これは管理釣り場でも野釣り場でも同じです。この時季のへら鮒は、まだ活性の低い個体もいれば、食い気をだしたやる気のある個体も増えてきます。そういう不安定な活性なので、エサもそれに合わせるように、両グルテンと両ダンゴの中間的な位置付けになるブレンドが効果的です（ブレンドは次頁）。釣り方はいわゆる底釣りですので、正確にタナ取りを行ない、基本どおりエサをしっかりナジませることを意識してください。

タックルセッティング

沖の底狙いの場合、ウキが小さいとオモリ量が少ないので振り込みにくい。自分が振り込めるオモリ量を背負うウキサイズを選ぶとよい。また、その際仕掛けを短くするとより振り込みしやすくなる。



ダンゴとグルテンの中間エサ

●エサブレンド

「もちグル」50 cc +
「ダンゴの底釣り芯華」150 cc +
水 125 cc



+

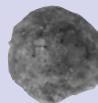


+



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●作り方

「もちグル」50 cc、「ダンゴの底釣り芯華」150 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 125 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう 20 回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。3~4目盛りのナジミ幅がでれば OK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること=底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



●ウキの選択

ウキのサイズは水深によって変わってきます。水深ごとの目安を記しましたが、迷ったときは大きめを選択してください。

水深に合わせたウキのボディーサイズ

2.5m	12 cm	3m	13 cm
3.5m	14 cm	4m	15 cm

●ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両ダンゴの底釣りの場合、3～4目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることになります。逆に多い場合は、タナが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えてでも同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

●上手く釣れないときは……

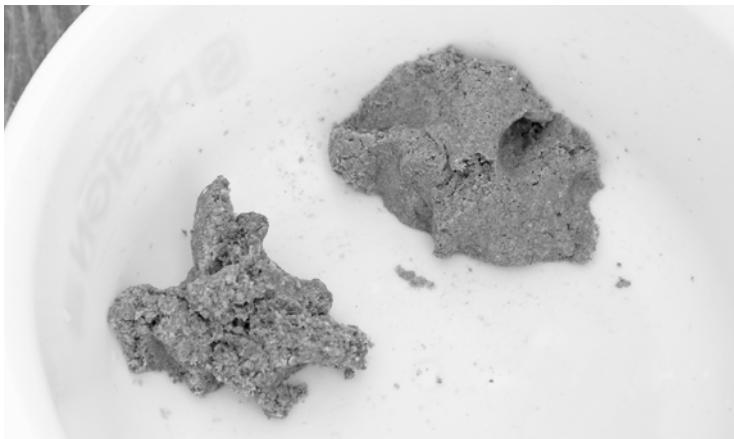
両ダンゴの底釣りでウキの動きがおとなしい場合は、それほどへら鮒の活性が高くない証拠。グルテンセット、両グルテンとエサを変えて様子をみます。それでも動きが少ないとときは底釣りを諦めましょう。

両ダンゴの底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

ダンゴとグルテンと中間エサは、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。活性の高い魚と低い魚が混在する春先は、活性や寄り具合によって微妙な調整が求められます。エサ付けの圧や大きさも工夫しましょう。



左が基工サ。右が押し練りを何度か加えた状態。押し練りをしてエラーを抜いていくとエサが持つようになる。魚が寄つてナジミが浅くなればさらに押し練りを加える。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエラーを抜くのが“押し練り”。エラーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



早春の野釣り場で有効

グルテンセットの チョーチン釣り

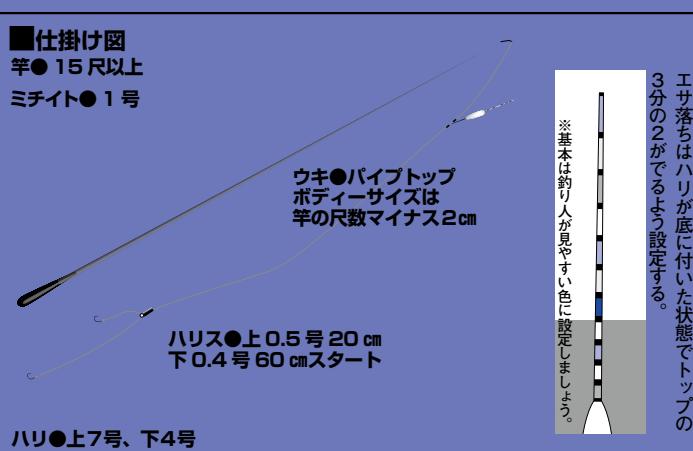
釣り方の基本

グルテンセットのチョーチン釣りは、春先の野釣り場（山上湖や準山上湖）で有効な釣り方です。放流からしばらく経過した頃、また、放流後の口を使わなかった新べらが春先になって食いが立つことがあります。そういうときこそこの釣り方の出番です。水深のある野釣り場がターゲットとなりますので、ボート釣りがメインですが、水深のある桟橋でも有効です。

釣り方の基本はバラケエサをしっかりナジませてへら鮎を寄せ、くわせエサのグルテンを食わせること。ですから、バラケエサがナジまない、ナジんでもすぐ抜けてしまうのはNGです。ウドンセットとは違い、グルテンセットの場合はバラケエサが付いているときにアタラせるようにするのが基本です。ですから同じセット釣りでもウドンセット釣りとは違い、どちらかといえば共エサの釣りと同じような感覚で釣っていく釣り方と言えるでしょう。

タックルセッティング

エサをしっかり抱えてくれるパイプトップを使うことで確実にタナで釣るよう意識します。へら鮎の反応が悪いときは、ハリス段差を広げましょう。



しっかりナジんでタナでバラける

●バラケブレンド

「瀑麩」100 cc+
「段差バラケ」400 cc+
「バラケマッハ」200 cc+
「ふぶき」200 cc+
水 200 cc



+



+



+



+



●作り方

「瀑麩」100 cc、「段差バラケ」400 cc、「バラケマッハ」200 cc、「ふぶき」200 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水200 ccを注ぐ。それを20~30回ムラなくかき混ぜる。半分ほど小分けし、押し練りでエアーを抜いてエサが持つよう調整する。エサが持たない場合は、再度押し練りを加える。トップ先端までナジむようにする。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●くわせエサ

「もちグル」25 cc +
「わたグル」50 cc +
水 100 cc



●作り方

「もちグル」25 cc、「わたグル」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう20回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。グルテンだけで2目盛りぐらいのナジミ幅がでればOK。

エサの大きさとハリ

実寸大



推薦ハリサイズ=4号

●しっかりナジませる

ウキの動きがでないときは、エサがバラけてしまいタナの魚量が少ないのでサワリやアタリがでないこともあります。そこで、今まで以上にバラケエサをタナに届けるようにします。押し練りを加える、しっかりハリ付けするなどして少しでもウキを深く入れるようにして、タナに魚を寄せるようにします。これで魚が近づくようになり、サワリやアタリが増えるはずです。

●アタリがないときは……

サワリがあるのにアタリがないときは、肝心のくわせエサが持っていない可能性があります。グルテンを押し練りしたり、手揉みしたりして確実に持つようにしましょう。

グルテンセットのチョーチン釣り 実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けしてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度も繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。



バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

春先を想定した

ウドンセットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

へら鮎の活性が徐々にあがってくる春でも浅ダナのウドンセット釣りがメインとなります。厳寒期とは違い、ある程度バラケエサに強く反応するようになります。ときにはバラケエサを食ってくることもあるでしょう。それでも高活性の手前、バラけた粒子に寄ってきたへら鮎にくわせエサを食わせるセット釣りの図式が基本です。厳寒期と比べそれなりにバラケエサへ反応するからこそ、よりバラケエサをナジませることを意識しなければなりません。必要以上にエサがバラけすぎるとへら鮎はバラけた粒子とともに狙いのタナから離れてしまいます。ですからウキのトップ先端までどっぷりナジませることを最優先にします。そこからへら鮎の動きに合わせてエサの大きさを変えてみましょう。寄りが少なければ大きめ、寄りが多いなら小さめにします。このエサの大小での対応で釣ることから始めましょう。

タックルセッティング

竿はエサ打ちのコントロールがしやすく、手返しのよい短めが基本ですが、周囲との兼ね合いで少し長めでもOKです。下ハリスは長めからスタートし、詰める方向で探ります。動きが少ないときはタナを深くしてみましょう。

■仕掛け図

竿●8尺（規定最短）

ミチイト●
(タナ 50 cm) 0.8号
(メーター規定) 0.8号

ハリ●
(タナ 50 cm) 上5号、下3号
(メーター規定) 上6号、下3号

ハリス●
(タナ 50 cm) 上 0.5号 8cm、下 0.4号 40 cm
(メーター規定) 上 0.5号 8cm、下 0.4号 50 cm

ウキ●バイブトップ
(タナ 50 cm) ボディー 4.5 cm
(メーター規定) ボディー 5.5 cm



エサ落ちはくわせエサを付けた状態で水面に4目盛りでいるよう設定する。

「粒戦」が多くてもまとまりやすい！

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc +
「瀑麩」100 cc +
水 150 cc +
「ふぶき」200 cc



●作り方

「粒戦」100 cc、「瀑麩」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。吸水させるために 10 分ほど放置する。そこへ「ふぶき」200 ccを入れ、20 ~ 30 回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



●くわせエサ

「力玉ハード(S)」

「力玉」の「さなぎ粉」漬け

「感嘆」 ウドンセットの浅ダナ釣りのくわせエサは「力玉ハード (S)」、「力玉」の「さなぎ粉」漬け、「感嘆」がおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。

●タナを深くする

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみましょう。春とはいえ、日によってはへら鮒は上層に上がってこないこともあります。タナ 50cmで当たらなければ、20~30cm深くします。メーター規定のある釣り場でも 1m のタナで釣らなくてはいけないことはないので、1.3m とか 1.5m と少し深いタナを狙ってみましょう。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めです。これでアタリが多くで、空振りやイトズレなどが目立つときは 5cm詰めてみます。それでも空振りが多ければさらに 5cm詰めましょう。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻しましょう。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることは充二分にあり得ます。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないとときは軽いもの、動きが多いときは重めにするのが基本です。

●上手く釣れないときは……

サワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、浅ダナが成立しない状況と判断します。タナの違う釣り方、チョーチンセット（8ページ）や段差の底釣り（12ページ）に切り替えましょう。

ウドンセットの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむづかしいのです。あまりエサをいじるなと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けしてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度も繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。



早春から始まる 両ダンゴの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

盛期の釣りの代表格である両ダンゴの浅ダナ釣りですが、シーズンによっては早春（3月頃）から釣れだすこともあります。ただ、最盛期とは違いへら鮒の寄りも少なく、活性もそれほど高くないことが多いので、仕掛けやエサはワンランク落とした弱いものを使います。それでも釣り方の基本は同じ。一番重要なのはエサを持たせることです。ダンゴエサそのものを食わせる釣り方ですので、まずはエサが持ていなくては始まりません。エサの重さでウキのトップ先端までナジませるよう心がけましょう。また、盛期とは違いへら鮒の動きもゆっくりなことが多いので、しっかりナジんだところからじっとさせ、そのあとでサワリがでてアタリにつながるような動きが基本です。ひとつ付け加えるなら、この時季はへら鮒の寄りが盛期ほどではないので、寄せることを意識して、エサ打ちの回転を早くしましょう。

タックルセッティング

盛期の両ダンゴ釣りと比べるとライトな設定。ウキは小さく、ハリスは長く、ハリが小さくとワンランク落としたところからスタートする。



硬さで持たせてタナでアピール

●エサブレンド

「カクシン」200 cc +
「浅ダナ一本」200 cc +
「凄麁」100 cc +
水 100 cc



+



+



+



●作り方

「カクシン」200 cc、「浅ダナ一本」200 cc、「凄麁」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20 ~ 30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●タナを調整する

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみよう。水温が低いとへら鮒は上層に上がってこないこともある。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないで、少しずつ深くして1.5mぐらいのタナまで様子を見よう。逆に活性が高いときはタナを浅くします。タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすることで余計な動きが減り釣りやすくなります。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしています。これでアタリが多くでて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cmずつ詰めてみよう。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めていきます。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先しましょう。

●手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣れればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをして少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

●上手く釣れないときは……

しばらくエサ打ちしてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、両ダンゴが成立しない状況と判断します。周りの釣れ具合を確認して浅ダナセット（4ページ）、チョーチンセット（8ページ）や段差の底釣り（12ページ）に切り替えましょう。

両ダンゴの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアーを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



●実釣編



●対談編

ハシャギを抑えて 分厚く 寄せる。

新
発
売

寄せを維持するボソッタチでありながら、まとまりも良好なバラケエサ。丸めやすく、指圧によるウキのナジミ幅のコントロールが容易。上層の魚を刺激しないように沈下し、タナで重さを備えた素材が弾けるように拡散。直下へと降り注ぎ、ウワズリやウキに現れる余計な動きを抑えながらくわせエサと同調。食いアタリを導きます。

●灑鰐(はくふ) 300g(チャック袋)



X (旧Twitter)、Facebook、Instagramで情報配信中!

丸キュー株式会社

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909

ホームページアドレス <https://www.marukyu.com/>

2025.11.13 13:00